

Eureka XIII

六年制通信 No.34 令和8年1月30日(金)号

黙思

六送会の最後の挨拶で「黙思」（「黙想」と言ったか「瞑想」だったか忘れましたが）の話をしました。私は「日課」の力を信じているので、例外なく毎日行うことが如何に大きな力になるかを君たちに何度も言ってきました。学問の大禁忌は作輟なり、ですよ。黙思を日課にすればどのような変化があるのでしょうか。毎日を静かな心で過ごせる、ような気がしますが、どうでしょう。最近「日課」を英語で何と言うのか考えているのですが、なるべくルーティーン (routine) を使いたくない気がして daily task ではどうかと考えたのですが、やはり routine のようですね。ま、いいけど。

さて、「黙思」ですが、これは実は新渡戸稲造の『修養』から感銘を受けて君たちに話しているのです。新渡戸博士については以前『武士道』を紹介しましたね。戦前には国際連盟の事務次長を勤められた、日本人きっての国際人です。今ならとても信じられないことです。しかし当時の日本は海軍力が世界第三位ですから、国際的な発言力が大きかったのです。これも現代人には想像もできないことなのでしょう。教育現場では教えられないことが多いので、諸君も自分で勉強しないとイケないですね。

新渡戸博士は明治10年に15歳で札幌農学校に入ります。あのクラーク博士の学校ですね。余談ですが、私はクラークが農学校に赴任してすぐに言った「どうしてそんなに細かく校則を決めなくてはならないのか。Be gentlemen! (紳士たれ!) だけで十分ではないか」を未だに理想としています。大急ぎでつけ加えますが、当時の農学校は男子校ですから Be ladies! がないのです。悪しからず。

図書館の洋書を読破するほどの多読ぶりで、あだ名はモンク (monk=修道士) でしたが、あるときアメリカの雑誌か何かでトーマス・カーライルに『サーター・リザータス』(Sartor Resartus) という著書があることを知ります。これはラテン語ですから英語に訳すと Tailor ReTailed、つまり「仕立て直された仕立て屋」で、日本語訳としては土井晩翠の『衣裳哲学』や石田憲次の『衣服哲学』が有名です。晩翠の訳からは以前「雄弁は銀、沈黙は金」の箇所を紹介したことがありますよ。覚えていませんか。ちなみに『サーター・リザータス』の英語ですが、私が今まで出会った中でも指折りの難解さで、とても正確に読む自信が(今でも)ありません。翻訳も難しく、内容を簡潔に紹介する技量が私にはないので、その昔先生に教えていただいたことをそのまま書きますと、科学至上主義に陥りそうな世の中に警鐘を鳴らし、精神生活をとり戻すべきだという内容とのこと。新渡戸博士はこれを十代で読み、一読大いに感銘を受けたと言っていますから、私は新渡戸博士の英語力に度肝を抜かれ、当時

のエリートの英語力にまず感銘を受けましたな。興味のある人はいつか原文に挑戦してみてください。晩翠の訳も復刻すればいいのにね。

『修養』は明治44年9月3日に出版され、当時広く読まれた本です。「実業之日本」という雑誌に連載されたものですから読みやすいですね。私はタチバナ出版の文庫版を持っています。苦労した人間の人生論と言っていいでしょう。非常に具体的で、「決心の継続」「勇気の修養」「克己の工夫」あるいは「貯蓄」など全部で17章あって14章が「黙思」に当てられています。

忙しくせわしない日常にあって静思沈黙することの大切さを実体験とともに説かれています。言葉を発せず、聴覚と視覚を遮断し、5分でも10分でもいいから毎日静かな時間を過ごすことを奨励しています。朝でも寝る前でもいいが、博士は黙思するときは必ず姿勢を正すべきだと言っています。また、博覧強記の博士ですからこの本には洋の東西からの引用が多く、少し紹介すると「万籟寂として声なき時、静かに黙思すれば、身は全く世間を超脱するであろう」（万籟：ばんらい=世の中のありとあらゆる音）とかカーライルの金言として「蜂は暗闇でなければ蜜を作らぬ。脳は沈黙でなければ思想を生ぜぬ」など、読む者をして納得せしめる言葉がさらりと書かれています。

初めのうちは邪念が入り込んでくるのだが、そこでやめないで継続しなさいとも言っています。やがてそれらを追い出すことが出来るようになる。そうして静謐に身をゆだねることが出来ると。その、たとえ5分間でも日常の自分とは異なる自分になれるとも言っています。さて、諸君。試してみますか？

今週のおすすめ

・直島 翔 『テミスの不確かな法廷』（角川文庫）

『聖の青春』が映画化された時、ぽっちゃりぼちゃの村山聖を誰が演じるのかと思ったら松山ケンイチでした。シェイプが全く違うではないかと思いながら観たのですが何と途中から村山聖そのものに見えてくるではないですか。役者というのは大したものだと感心しましたよ。ちなみに羽生善治永世七冠役は東出昌大で、この人は登場した瞬間から羽生さんでした。羽生さんの仕草や目線など完璧でしたね。

それで松山ケンイチという役者さんが主演というので「テミスの不確かな法廷」を観ようと思ったわけ。毎週火曜日NHKですね。いつものように、ついでに原作を読んでみたら、面白かったので紹介します。実際にこんな裁判官がいるのかどうか知りませんが、松山さん演じる裁判官の安堂青春は十歳で発達障害と診断され、以後人の気持ちを読み取るのが苦手な自閉症スペクトラム症（ASD）、衝動性がじっとしていることを許さない注意欠如多動性（ADHD）を自覚しながら生きています。困ったことがあると主治医の山路先生と時々テレビ電話をします。テレビでは和久井映見が演じています。この本では事件の真相究明も面白いのですが、安堂の困った症状が詳しく描かれています。そっちの方に感心してしまいました。ドラマでの松山さんの演技もほぼ本に忠実ですね。やっぱりプロの俳優さんです。本もドラマもどうぞ。

BGMは HY の 恋をして でした…。